

□「災害に強いまちづくり」

京都市南区東和学区松田町東自主防災部

防災部長 野 口 義 廣

—はじめに—

松田町東自主防災部は、72世帯で構成されている。京都市の中央南部の旧市街地で、まち並みは狭い道路と木造住宅の密集、更には住民の高齢化の進展といった地域環境にあります。

従前から、住民の間では「もし、火事が起こったら怖うおすなあ」と危機感を募らせているものの何の対策もなく、地震や火災などの災害を運命づけて受け身に立っているかのようなものでした。

しかし、先般の阪神・淡路大震災を契機として一部の住民から「みんなで力を合わせて自分たちの町を災害から守ろう」という防災意識の高まりが生まれて来たのです。

—みんなで考えて……—

ちょうどその頃、私たちの町内を担当されている南消防署の方が来られ、私たちの町内を対象として「地域ぐるみの防火・防災対策の推進」に努めてみませんか。との呼び掛けがありました。

「地域ぐるみの防火・防災対策の推進」と

は簡単にいうと、消防署員が町内の各家庭を訪問して、家庭内の防火安全状況を点検し、その情報をパソコンに入力して「出火防止あんしん度」を評価するとともに、家屋の間取りや家族の就寝場所などの情報から「焼死者防止あんしん度」を算出して、更には、ある家庭から火災が発生したと想定しての延焼拡大の推移などを予測して、どの程度の被害が出るかをシュミレーションして、地域ぐるみでの防災対策を考えてみようというものでした。

私は町内の防災を担当する者として、是非、この事業に取り組みたいと考えました。

しかし、この事業は町内の全家庭の協力が必要で、阪神・淡路大震災直後とはいえ、ひと昔前に比べて、住民連帯意識が希薄化しているといわれるこの時代に、皆さん受け入れられるだろうかという心配がありました。

早速、私は町内会長と役員宅を訪れ、この事業の趣旨と目的について説明したところ、「町内の深刻な問題につき、この機会に考えよう」との賛同を頂き、町内全家庭にこの事業の趣旨を理解して頂くため、防災集会を開催することとしました。

—防災集会にて—

防災集会では、町内の皆さんから、阪神・淡路大震災で感じたことや、「もし、町内のどこかで火災が発生すれば、と考えると夜も眠れない。」「5年後、10年後の将来を考えると非力な自分が悲しい。」などの率直な意見が多く出され、災害に対する危機感は相当なものだと痛感したのです。

私の心配は一瞬にして晴れ、「みんなで力を合わせ災害に強いまちづくり」を合い言葉にして、消防署の力を借りて、この事業に取り組む決意が固まりました。

—防火診断が始まった—

消防署による防火診断を前にして、私は家の中の整理整頓、特に炊事場を始めとする火の元の確認を回覧紙により訴え、各家庭では事前準備が展開されました。

そして、毎日のように消防署員が町内を訪れ、各家庭の防火診断が開始されました。

各家庭では、タコ足配線の是正、仏壇のローソク周囲の不燃化などの指導により防火の徹底に取り組みました。

この頃から、井戸端会議があちらこちらで見られ、「防災」への取組みが町内の団結を高めていることを実感していったのです。

—努力空しく—

約2カ月による全家庭への防火診断が終了しました。

防災の専門家である消防署員の目と、先進のパソコンが算出した結果は、意外にも町内の皆さんの努力も空しく大変悪いものでした。

古い木造の家は一瞬にして燃え広がり隣

接の家へ延焼し、高齢者の増加と相まって焼死者がでる危険が極めて高いということでした。

私は、この結果に「災害の起こらないことを祈るしかないのか。」と逃げ腰になりましたが、それでは今までの私たちと同じであり、ここで諦めるわけにはいかなかったのです。

—「防災計画(案)」の作成—

防火診断の結果を町内の皆さんへ報告するに当たり、2回目の防災集会を開催することとなりました。

防災集会を前に、私は町内の防災環境を向上させるためには、現状にマッチした独自の具体的な方策が必要であると考えました。そして、消防署、地元消防団、学区自主防災会長からの助言を頂きながら「防災計画(案)」を作成しました。

この計画書は、阪神・淡路大震災で得た近隣協力の重要性を顧みて、協力体制の充実を前提として具体的な対策を示すもので、私から町内の皆さんに対する「意見書」でもありました。

—2回目の防災集会にて—

さて、防災集会が開催されました。

始めに、消防署員から防火診断の結果について説明がされ、皆さんの残念な表情が印象的でした。

次に、私が「防災計画(案)」を配布してその説明に入りました。

皆さんは、私の一言ひとことに、うなずきながら熱心なまなざしで話を聞き、その後検討に移りました。

1 住宅用火災警報器の設置について

火災発生時の被害軽減と焼死者防止を目的として、より早く火災を発見し隣近所に知らせる事ができるとともに、比較的価格の安い住宅用火災警報器の各家庭への導入は、私たちが取り組む「地域ぐるみの安全」に最も適するものでありました。

皆さんの関心も高く、是非設置したいとの願望が高く、また、できる限り多くの家庭へ設置されなくては意味が薄くなるとの意見もあり、主に予算面についての検討となりました。

町内会費で一括購入して全家庭に配布できれば良いのですが、町内にそんな予算はありません。町内会の役員さんからの提案で、町内会から購入費用の一部を補助することで話がまとまりました。

第1回目の感知器購入を募ったところ、72世帯中、約72パーセントの52世帯の家庭から申し込みがあり、現在ではほぼ全家庭に設置されています。

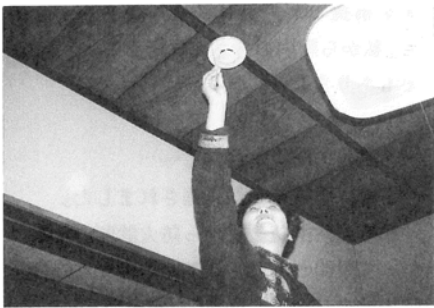


写真 住宅用火災警報器の取付け

2 非常ベルの設置

有事の際、いち早く住民が集合できるものとして、押しボタン式の非常ベルを設置しようというものです。

この件についても、皆さんの期待は大き

く、住宅用火災警報器と合わせての設置で効果が高く、安心感も大きいとのことで設置することになりました。

すぐに設置しよう、との意見が多く、その年に予定していたレクリエーションの予算を流用して設置することとなりました。

現在では、町内の7ヶ所に押しボタンが設置され、このボタンを押せば3ヶ所のベルが町内中に鳴動します。

3 消火器の増強

町内では7本の消火器(化学泡20型)が設置されているものの、世帯数から見た場合の本数が少ないとの指摘から増強することを提案しました。

しかし9消火器は以前から置く場所がないこと、過去に盗難にあったこと、詰め替え費用がかかること等、多くの問題があり、色々な意見は出るものの、決定には至りませんでした。しかし、消防署員から、消火器1本と水バケツ3杯とほぼ同等の消火効果がある、との助言で、水バケツを置くことを決定しました。

現在では、各家庭の玄関前に1個から3個の水バケツが置かれ、道路を見渡すと色とりどりのバケツが一行に並び、結構美観的にも良いものです。

4 防災訓練の実施について

住宅用火災警報器、非常ベル、初期消火器具の増強と設備面を強化しました。次は、これらを活用した訓練です。

かねてから消火器の放射訓練等は行っては来たのですが、平日の昼間に火災が発生した場合を考えると主婦と高齢者で対応しなくてはなりません。この状況を想定した訓練が必要であると考えました。

火災警報器の音を隣の人が聞き、現場を確認して、非常ベルを作動させる。そして町内の在宅者が付近の消火器や水バケツを現場へ搬送する、といった行動手順です。

老若・男女問わずに、それぞれに出来る役割がきつとあるはずで。

消火器の搬送は、体力的に一人で無理なら二人で運んだら良いのだし、赤ちゃんのいる若い婦人なら、赤ちゃんを近所のおばあちゃんが預かってあげれば消火器の放射に参加出来ることと思います。

このような住民の連帯と連携が必要なのです。

先般、消防署と消防団からご指導を頂きながら、なんとかその方向性が見えた一連の訓練が実施できました。



写真 町内防災訓練の状況

5 高齢者対策

京都市では、近年、火災件数は横ばい状態であるものの焼死者が増加し、その対象が高齢者と幼児であるということです。

防災集会では、高齢者を災害から守るために事情に詳しい町内の民生委員が中心となり、検討を重ねた結果、次のことを決定しました。

(1) 70 歳以上の高齢者を対象として民生委員等が中心となり、焼死者防止を主眼と

した巡回訪問を毎月 1 回実施する。

(2) 巡回訪問の結果、有事の際の避難が困難と認められる場合は、民生委員と防災部長が福祉事務所へ相談し、緊急通報システム等の機器の設置を申請する。

(3) 高齢者世帯の隣近所の者は、常に同人の健康状態の把握等に努める。

町内には、70 歳以上の方同志の同居又はひとり暮らしの家庭が 9 世帯あり、京都市の福祉事業の一環として、火災警報器と自動消火装置がセットで設置されています。

先般、町内の人からこんな話を聞きました。「毎日、私は新聞を取る時、隣の……さんのところの新聞受けを見るんです。そこの新聞がなかったら元気なんや、と思ってるんです。」

—おわりに—

防災集会で検討を重ね、消防署のご指導を頂き、町内の「防災計画」ができました。

この計画は、町内の皆さんの総意であるとともに、団結のあかしでもあります。

この防災に対する熱意を絶えさぬように、計画に従って、日々防火・防災に努め、地域ぐるみで、あんしんして暮らせるまちづくりを献身的に行う覚悟であります。

最後に、私はラグビーが好きで、ラグビーのキャッチコピーに「みんなは、一人のために、一人はみんなのために」という言葉があります。

私たちが取り組んでいる「地域ぐるみの防火・防災対策の推進」はまさに、この言葉通りではないでしょうか。